



第 1 日

国 語

(9 : 30 ~ 10 : 20)

注 意

- 1 検査開始のチャイムがなるまで開いてはいけません。
- 2 問題用紙は表紙を入れて6ページあり、問題は一から三まであります。これとは別に解答用紙が1枚あります。
- 3 問題用紙と解答用紙に受検番号を書きなさい。
- 4 答えはすべて解答用紙に記入しなさい。

受検番号	第	番
------	---	---

一 次の文章には、近ごろ嫌なことが続いている高校三年生の夏代のことが描かれています。この文章を読んで、あとの問い合わせに答えなさい。

夏休みも半ばを過ぎたある日の塾の帰り道、混み合った電車に揺られていた夏代は、今まで心地良く脳味噌^(のうみそ)に侵入してきていたヒューアイ・ルイスの歌声が、だんだん^①薄^(のろ)れていくのに気がついた。夏代はウォークマンを揺すってみた。するとブチリというイヤな音が^②鼓膜^(こまく)に伝わり、ヒューアイはまるつきり黙つてしまつた。あとはもう、振つても叩いてもウンともスンとも言わない。「……ばかりお。」思わず低く呟^(つぶや)くと、隣に立つていたサラリーマン風の若い男が、驚いた顔で夏代を見た。

翌日、電機屋にウォークマンを預けてから、夏代は塾に向かうために途中下車してそこからバスに乗つた。塾を終えて、さあ行こうかという

ときになつて、夏代は「ひっ」と声にならない声を出した。かばんの中

に財布がなかつた。帰りの電車賃だけ友達に借りて夏代は帰途についたが、電車の中では、失くなつた財布のことを a 現金は大して入つてなかつたけれど、銀行と郵便局のキャッシュカードを入れていた。途中下車してバスに乗るときまではあつたわけだから、落としたとするとバスの中か、それともバス停か……。母親にこつぴどく叱^(しか)られ、取りあえず銀行と郵便局に電話してキャッシュカードの取引停止手続きをした。次の日、夏代は塾を休み、途中下車した駅の駅前にある交番へ出向いた。

交番には若いお巡りさんと年とつたお巡りさんがひとりずついて、年

とつた方が夏代に椅子^(いす)をすすめた。「落としたのはどこ?」「あのバス停のとこ……だと思うんですけど。」「どんな財布?」「えーと茶色い革のヤツで、わりとおつきくて、一方がボタンになつてて……。」そこで、今まで奥の扉のむこうにいた若い方が、扉から半分顔を見せて大声で言つた。「あー、③届いてるよ、それ。」若いお巡りさんは机の引き出しから、こともなげに夏代の財布を取り出した。「これでしょう。」「そうです!」夏代は飛びあがりたいのを我慢して、財布を引き取るためのいろいろな書類に住所や名前を書きこんだ。中のものは何ひとつ失くなつていなかつた。「良かつたねえ、無事戻つてきて。」年とつた方がニコニコしながら言つた。なんだかここ数か月のうちで、久しぶりに他人に優しくされたような気がして、夏代は不覚にも涙ぐみそうになりながら「ハイ。」と答えた。

帰り際^(きわ)、夏代はお巡りさんたちから一枚の紙きれを渡された。財布を拾つてくれた人の住所や電話番号が書いてあるもので、電話してお札を言つておきなさいと言われた。「藤原俊造^(ふじわら) 七十二歳^(しじゅうにさい)」紙きれの一行目に読みにくく行書体でそう書かれていて、住所は世田谷区玉堤となつてゐる。ここから歩いても、さほどの距離ではなかつた。夏代は久しぶりに、ほんとうに久しぶりに明るい気持ちになつていたから、電話をするよりも直接行つてお札を言おうと考えた。

駅前から銀杏^(いちょう)の並木道をずっと歩いていくと、途中にある花屋の店先に明るいオレンジ色の花が咲いていた。何の花かと思つて近寄つてみると、それは花ではなく少し早いほおづきの実だつた。夏代はほおづきを

買った。愛想のいい店のおばさんが、「少し **b** しどきますね。」

と言いながら一本余分に持たせてくれた。夏代はほおずきを花束のよう
に抱えながら並木道を歩き、坂道を下り、昇り、また下つた。川っぷち
の町に着いて、商店街で訊ねながら行くと、その家は案外簡単に見つか
つた。

a

ひつそりとした、木造の小さな家の門柱に「藤原」という表札が見え
た。人気のない玄関の引き戸の前で、なんとなく入りかねていると、
④ 背後で足音が聞こえた。犬を連れた老人が立つっていた。柴犬に似た雑
種らしい犬は、はツはツと息を吐きながら立ち止まつた主人を見あげて

いる。「あの……、藤原俊造さんですか。」「そうですが。」老人は不思
議そうに、ほおずきの花束を抱えた奇妙な女の子を見つめた。「あの、
あたし、お財布拾つてもらった者なんですけども……。」「ああ。」老

人は合点がいったように頷いた。「あの、ほんとにありがとうござい
ました。」そう言つて頭を下げたとたん、唐突に冷たい涙が滝のように
夏代の頬を流れ落ちた。びっくりしたのと恥ずかしいのが一緒くたにな
つて、夏代の身体の内側を駆けまわつた。夏代は「お礼です。」と叫ぶ
ように言つてほおずきを老人に渡し、驚いた顔の老人と犬に「さよなら
つ。」と言つた。

駅へ続く坂道を、夏代は駆け昇つた。心臓がぱくんぱくんと音を立て
た。終わりかけた夏の風が夏代の頬をすべつていった。そう思つてした
ことでなくとも、優しさとか善意とかいうものは確かに人間を救うこと
があるんだな。わけのわからなくなつた頭の中で、夏代はそんなことを

考えていた。何か月ぶりかで走つた。何か月ぶりかで身体が汗のぶんだ
け軽くなり、そのぶん心も軽くなつたような気がした。

(鷺沢 萌 「ほおずきの花束」による。)

1 ①～④の漢字の読みを書きなさい。

2 **a** にあてはまる最も適切な表現を、次のア～エの中から
選び、その記号を書きなさい。

ア 軽くみていた イ いさぎよくあきらめていた

ウ 忙しく考えていた エ なつかしく思い出していた

3 **b** にあてはまる適切な表現を書きなさい。

4 **1** 良かつたねえ、無事戻つてきて を、どのような気持ちが伝わるよ
うに朗読するのが適切ですか。その気持ちを書きなさい。

5 **2** 老人は合点がいったように頷いた とあるが、老人は具体的にどの
ようなことがわかつたのですか。三十五字以内で書きなさい。

6 次の文章は、第七段落における夏代の気持ちについて述べたもので
す。空欄Ⅰにあてはまる最も適切な語を、あとア～エの中から選び、
その記号を書きなさい。また、空欄Ⅱにあてはまる適切な表現を、十
字以内で書きなさい。

駅へ続く坂道を（I）して駆け昇つた夏代は、今までの重か
つた心が軽くなるのを感じた。それは、（II）にふれたことか
ら生じた気持ちである。

ア 緊張 イ 期待 ウ 困惑 エ 興奮

二 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。

ことばが運ぶのは、伝えようとする情報だけではない。当人の意図とは関係なく、その事柄を選び、そんなふうに表現したその人自身の、立場や態度や評価や配慮、性別や年齢、感じ方や考え方、価値観や教養や品性を含めた人間性が相手に**否応**なく伝わってしまう。

ひとつの文章が生まれるまでには、無意識のうちに発想や表現のさまざまなものでの選択が①ツツみ重ねられる。その過程での人間の在り方が、結果として姿を現す言語作品に映っているからである。表現の外面から発想の内面へとそのレベルを順にたどつてみよう。

もつとも浅いレベルは、あることばをどんな文字で記すかという選択だ。何の変哲もない「中村」も「ナカムラ」と書けば日系人めいて見えるし、「中むら」という看板は何やら料亭じみた雰囲気を漂わせる。外来語は通常カタカナで書くが、慣用を破って「ふるんす」と書くとやわらかい感じになり、「仏蘭西料理」^{ふらんすりょうり}という看板を見ると何だか高級そうで財布の中身が心配になる。これらはいずれも、文字表記の選択が独特的の語感をかもしだしている例である。

このような文字選びより少し深いレベルに、ことば選びがある。この用語選択にまた深浅のレベル差がある。伝達したい意味内容に関係なく、自分の品格や態度、相手への配慮に応じてことばを選ぶのは、表面に近い比較的浅いレベルだろう。「きょうは九月九日だ。」と言えば、相手と膝を交えてしゃべるような親しい感じだが、「です」にすると、いく

ぶん改まって相手と少し a 感じになる。そこを「でございます」にすると、相手をさらに丁重に扱った感じになり、大勢の人の前で礼儀正しく話しているような雰囲気が出る。 b 、そこをもし「である」と結べば、話している感じは消え去り、不特定の読み手に向けた、硬い書きことばの、やや冷たい、きっぱりとした、堂々たる調子に変わる。

「ふくらむ」と「ふくれる」は似たような意味だが、微妙な違いがある、もう少し深いレベルの用語選択となる。「ふくれる」のほうがくだけた感じがいくらくツヨいことを別にしても、「ふくらむ」が自然に起る全体的な膨張をすることが多いのに対し、「ふくれる」はやや不自然で部分的な膨張をすることが多い。そのため、「ふくらむ」は正常な変化ということから好ましい連想が働きやすく、「ふくれる」は異常な変化を思わせて③ワルい連想と結びつきやすい。そのため、事実を伝えるだけの「予算がふくらむ」に比べ、「予算がふくれる」という表現はその膨張を好ましくないと考えているようなニュアンスがともなう。これもまた語感の違いではあるが、意味とからみあう面もあり、単なる同義語の選択として片づけるわけにはいかない。

自分の伝えたい意味合いを正確に表すのにもつとも適切な表現を探そう。正確なことばというのは、単に誤りを含んでいないだけではなく十分だ。「休憩」か「休息」かと迷ったとき、両方やめて「休み」という語で間に合わせれば、そんな微妙な意味の違いに悩まずに済む。「休み」には「休憩」も「休息」も含まれるから、たしかにそれでも間違い

ではない。が、「休み」は、その「休憩」と「休息」だけではなく、「休暇」「休日」「休業」から「欠席」「欠勤」「欠場」までを含む広い意味のことばだ。そういう区別をせずに単に「休み」とするのは、松も櫻も楓も桜も白樺も無差別に「木」で片づけ、小腸と大腸どころか胃も肝臓も脾臓も区別せずに「消化器」で間に合わせるような、そんな粗っぽさで現実を切り取つたことになる。

目的によつてはそれで済む場合もあり、もつときめ細かく表すべき時もある。場面や文脈などに応じて、自分の感覚・感情・認識をどこまで細かくとらえ、それをどれほど忠実に伝えたいかという、その時その場の表現意図に的確に対応する表現を追い求める。

ことばを選び、表現を練るのは、ことばをいじりまわすことではない。

文章を飾つて知識をひけらかすためでもない。表現しようとする対象のひだに分け入り、実際のイメージに接近しようとする④ドリョクなのだ。とすれば、人間がことばを選ぶとき、²その奥にある表現すべき対象や現実のとらえ方をも同時に選んでいることになる。ものの見方や考え方をはつきりさせ、何を対象にどの面をどう描くかという選択をとおして、その人自身が姿を現すのである。そういう人間の行動の反映として、表現は豊かな広がりを見せるのだろう。

(中村 明 「日本語 語感の辞典」による。)

- 1 ①～④のカタカナにあたる漢字を書きなさい。
- 2 a にあてはまる適切な表現を書きなさい。

3 b にあてはまる最も適切な語を、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア だから イ つまり ウ そして エ なぜなら

4 1 粗っぽさ¹ とあるが、筆者は、ことばのどういう選び方を粗っぽいと述べていますか。四十字以内で書きなさい。

5 2 その奥² とあるが、それは何の奥を指していますか。「何」にあたる最も適切な語を、文章中から抜き出して書きなさい。

6 次の表は、この文章を内容からI～IVの四つのまとまりに分け、それぞれの要点をまとめたものです。この表のⅢにあたる段落をすべて書きなさい。また、空欄cにあてはまるIの要点を、五十字以内で書きなさい。

IV	III	II	I	まとめり	要 点
もののかたかなの見方を明確にし、それに応じたことばの選択をとおして、表現は豊かな広がりを見せる。	場面や文脈に応じて、自分の表現意図に的確に対応する表現を追い求めることが大切だ。	文字表記の選択や用語選択によって、さまざまな語感や意味の違いを表現することができる。	c		

三 次の文章を読んで、あとの問い合わせに答えなさい。

故に去らず。

(「注好選」による。)

昔、三人の兄弟有りき。田祖・田達・田音と云ふ。^{すなは}即ちその祖の家
^{さて}庭の植え込み

三荊^{おや} || 文章中の「荊三茎」のこと。

に前栽^{せんざい}有り。四季に花を開く^{うぱら}荊三茎有りて、一花は白、一花は赤、一

花は紫なり。往代より相伝へて財^{たから}と為して、色に隨^{したが}ひ香に付きて、千

昔

万の喜び剩り有り。人々願ふと雖も未だ他所に有らず。即ち父母亡^う^{あま}1

せて後に、この三人身極めて貧し。相語らひて云はく、「吾が家を^わ売²」

りて「他国に移住せむ。」と。時に隣國の人、三荊を³買⁴ふ。已にこれを

売りて値を得つ。その明旦^{みやうたん}に、三荊花落ち葉枯れたり。三人これを見

て歎⁴ず。未だかくのごとき事をば見ず、と。呪^{じゆ}して云はく、「吾が三

代金

明くる朝

悲しく思^う

このような

祈願して

荊、別れを惜しむがために枯れたり。吾等留まるべし。^{われらとぞ}復^また返りて^ま榮^{はなさ}5

もう一度元のよう

かむや。」と。⁵即ち値⁵を返す。明くる日に隨ひて元のごとく盛りなり。^{ただちに}花が咲くだろうか

1 人々願ふと雖も未だ他所に有らずとあるが、このことから三荊が
どのようなものであることがわかりますか。次のアーエの中から最も
適切なものを選び、その記号を書きなさい。

ア 実用的なもの

イ 貴重なもの

ウ 役立たないもの

エ つまらないもの

2 売りての主語は何ですか。次のアーエの中から適切なものを選び、
その記号を書きなさい。

ア 三人 イ 家 ウ 三荊 エ 父母

3 買³ふのひらがなの部分を、現代かなづかいで書きなさい。

4 歎⁴ずとあるが、どのようにして二人は悲しく思つたの
ですか。現代の言葉で書きなさい。

5 即ち値⁵を返すとあるが、このようにして二人が三荊を取り戻した
のはなぜですか。現代の言葉で書きなさい。